

## ハスの三徳

観音さまの象徴はハスです。ゆえに、観音さまは必ず手に蓮華を持っておられます。観音さまは社会の泥を養分にして蓮華の花を咲かせ、この世を清浄にするために修行をなされています。観音経の経題が「妙法蓮華経」といわれるゆえんです。

ハスはお盆のころに花がひらく涼しげな夏の花です。ハスは日の出に咲き、日没に閉じることから、エジプトではハスから太陽が生ずると信ぜられ、神聖な花として崇拝しました。そのハスの神秘がインドに伝えられ、ヴェーダーの神々の持ち物になり、仏さまの台座になり、観音さまの象徴となって、仏教に深くとけこみました。仏教寺院の本堂には、仏像や須弥壇、仏天蓋、献花、台座、欄干など、蓮華をデザイン化した仏具や法具が多く備え付けられているわけです。

ハスは泥沼のなかに根をはって、泥に染まらぬ純白な花を咲かせます。咲けば必ず果実ができていて、あだ花がありません。その実は堅く、水も空気も通さず、何千年でも腐らず土のなかで生き続けます。ところがその堅い果皮を砥石でけずって水分を与えれば、たちまち永い眠りを破って芽を出します。かつて昭和二十六年に、植物学者の大賀一郎博士は二千年前のハスの種を遺跡から発見し、これを研究所にて発芽させることに成功しました。その花は「大賀蓮」と名づけられ、全国の池に毎年夏に咲きます。このように、ハスは人類が滅亡しても生き残る不思議な生命力を持っています。

ハスには三つ徳があります。

その一つは、沼池に咲きながらも、泥に染まらずに純白な花を咲かせます。つまり、ドロドロとした社会の悪や誘惑を養分として、人徳の花を咲かせます。これを「汚泥不染」といいます。

二つは、ハスにはあだ花がありません。開花すると同時に種子が既にできています。つまり、あらゆる生命は生まれると同時に「仏性」をもって誕生するということです。これを「花果同時」といいます。

三つは、ハスの種は幾千年たっても発芽力を失いません。誰もが仏の性質を秘めていますから、悪人も仏の縁に会えば懺悔の心が湧いてくるのです。これを「種子不失」といいます。

このように、蓮華はすばらしくめでたい花です。ところがハスは、香典などの不祝儀の袋にデザインされて、祝儀を包む袋に描かれないのはなぜでしょうか？ とても残念に思いませんか？